

近代における一日本人キリスト者の越境ネットワーク形成

——小林美登利の移動・遍歴を事例として——

根 川 幸 男

はじめに

近年、移民研究において、「越境史」(Transnational History)の有効性が評価されている。「越境史」とは、「一国史」に相對する概念で、複数国家・地域の関係・交差の視点から歴史を見直すアプローチであり、この視点からいくつかのすぐれた論考が発表されている。^①「越境史」は、もとは一九九〇年代の米国において一国史や比較史に対する批判から起こった新しい歴史研究のパラダイムである。^②すなわち、「越境移民」(transnational migration, transmigration)という二ナ・シラーの提示した概念^③にもとづき、「地理的越境」とどまらず、「政治的越境」「文化的越境」という枠組みを用いて一国史的視点に揺さぶりをかける。この越境史的方法による今後の日本人移民研究の検討課題として、次のものがあげられている。

・日米にまたがる越境教育ネットワークと満州、中南米、南洋などその関連国家・地域への影響

・日本人移民の北米、中南米、日本帝国植民地、オセアニア、ヨーロッパなどへの世界的展開、受入人間のクロスナショナルな研究
小稿は、このような越境史の枠組みにもとづき、右記のような課題に答えようとする一つの試みである。特に、越境史的方法による従来の移民研究はハワイ、北米を対象としたものが多く、ブラジルをはじめとする南米移民を対象としたものや日本、ハワイ、北米と南米という複数地域を横断するようなよりグローバルな視点でのアプローチは未開拓であった。

そこで、ここでは、第一次世界大戦期に日本を出国し、ハワイ、米本土、ブラジルにおいて伝道・留学・教育を体験した小林美登利(こばやし・みどり、一八九一―一九六二)の移動・遍歴を取り上げ

る。小林は会津出身で同志社に学んだプロテスタント牧師・教育者であり、ハワイ、米本土での遊学後ブラジルに渡航する。当時南米最大の商工業都市に成長しつつあったサンパウロ市に「聖州義塾」という教育機関や「サンパウロ教会」という日系プロテスタント教会、「伯国柔剣道連盟」という武道普及団体を設立し、キリスト教伝道や移民子弟教育に貢献した。また、プロテスタント諸教会や彼自身が学んだ同志社、マッケンジーなどの大学を通じて、内外の多くの知識人と交流のあった人物であった。⁵⁾さらに、伝道・教育事業の合間にブラジル中を旅行し、アマゾン河を遡り、アンデス山脈を縦横断するなど旅行家・冒険家としての横顔も持っていた。

ブラジルへの日本人移民は二〇〇八年に百周年を迎え、移民指導者については自伝も含めてすでに多くの評伝が発行されているが、小林については、日本、ブラジルいずれにおいてもいまだまとまった評伝が書かれていない。ブラジルでは、一九三三年の移民二十五周年以来たびたび日本人移民周年史が発行されており、小林と聖州義塾についてはその都度言及されているにもかかわらず、わずかに概略について知ることができるのみである。⁶⁾最新の周年史である『ブラジル日本移民百年史』第三巻文化と生活編(一)は、戦前から現代までのブラジル日系子弟教育、特に日本語教育の面を取り上げた通史的論考に一章を割いているが、小林についてはある日系小学校の父兄懇談会の講師として名が記されているのみである。⁷⁾越境

史や移民子弟教育史の面で、小林美登利と聖州義塾は、ハワイ・北米との関連性においても、日本のプロテスタンティズムの海外移植との関係においても、きわめて重要な研究対象となりうるにもかかわらず、現在まで学術的な論究がほとんどなされてこなかったといえる。⁸⁾

このような状況を考慮し、小稿では第一に、小林美登利という近代における日本人キリスト者の移動・遍歴を、会津時代、同志社時代、ハワイ・米国時代、ブラジル渡航後、一時帰国期という五つの時期に区分してその足跡をたどる。その中で、彼のような一地方青年のキリスト教入信と海外渡航・移民へ至る動機を確認するとともに、その越境過程で出会った人物との関係構築を検証する。特に、この人的ネットワーク構築の検証に当たっては、「縁」という概念を活用する。〈縁〉とは、個人に外在した間接的で与えられた原因・理由によって形成され維持される関係で、多くは特別な対人関係に対して用いられる。「ネットワーク」が複数者間相互のつながりや関係性の体系という意味合いが強いのに対して、〈縁〉は必ずしもそうではなく、ある個人が一方的にある他者との関係を意識したり思い込んだりすることによっても生じるつながりや関係性と定義しておきたい。⁹⁾この意味で、〈縁〉はネットワークを形成する契機となるものである。また、この〈縁〉の下位概念として、ここでは、地縁・学校縁・武道縁・信仰縁・エスニック縁¹⁰⁾などのさまざま

まな〈縁〉概念を用いる。

第二に、これらの〈縁〉を活用した小林の越境ネットワーク形成の過程とメカニズムを明らかにするとともに、そうしたネットワークを資源として生まれた聖州義塾の歴史的意義や役割について考察する。特に、小林がハワイ・米国に滞在した一九一六―一九二一年は排日運動が再燃した時期である。その排日の風潮の中に身をおいた実体験をブラジルでの活動にどのように反映させようとしたのかという問題を、彼の越境ネットワーク形成の過程と重ねながら、一九二八年の日本一時帰国と翌年のブラジル帰還までを対象として明らかにしていきたい。

こうした越境的アプローチは、従来国や地域別に研究される傾向の強かった近代日本人移民史を、日本、ハワイ、米国、ブラジルという複数の国・地域を横断する越境史というグローバルな視点で捉えなおす契機となる。また、近代における日本の国内状況とそれらの国・地域に拡散した日本人の関係を把握するだけでなく、日本近代史を移民も含めた「日本人の歴史」と捉えなおし、「日本史」の枠組みを再考するという課題においても重要な意味を持つと考えられる。¹¹⁾

一 会津時代

小林は、一八九一年四月八日、福島県大沼郡田川村（現・会津美

里町）佐布川に、父清八、母ミサの長男として生まれた。¹²⁾ 小林の下には、一八九七年一月に弟登次郎、一九〇五年一〇月には妹トミが生まれている（曾祖父父母の代からの小林家の系図をまとめると、一四三頁の「小林家系図」のようになる）。

父の清八は郵便配達夫で、多くの田畑を持たない小林家は貧しかった。¹³⁾ 小林の幼少時、東北地方の農村は現在では想像もつかないほど貧しく、一九〇二年に凶作、その翌年に暴風雨、さらに一九〇五年も凶作に見舞われ、また日露戦争による増税が重なった。凶作時には娘の身売りも多くあったという。一九〇六年五月には霜害で、大沼郡では村によって五割以上の桑園に被害があった。このような惨状の中で、彼の家庭もまた「赤貧洗うが如き」状態であったという。こうした人力では抗し得ない自然災害と貧困が、後に彼を信仰と海外雄飛へ向かわせる因子として働いたことが想像できる。貧しい中にも、小林は向学心旺盛で、地元の高田尋常小学校、同高等小学校に学んだ後、一九〇六年、旧制会津中学校に入学する。¹⁴⁾ 当時の小林については、佐布川の自宅から会津若松城下の中学まで「二里余の道を高下駄で通学、洗いざらしの着物に短い袴をつけ、教科書とメッパを包んだ縞の風呂敷を左肩からわき下に背負い、剣道の長い竹刀を左手に握っていた姿」が伝えられている。¹⁵⁾ 小林は生涯武道に親しんだが、とりわけ剣道に力を入れ、中学四年生の時、剣道大会で七人抜きを達成している。¹⁶⁾ 後述するように、小林は武道

縁によっても越境的な人的ネットワークを形成している。

会津は同志社の創立者の一人である山本覚馬、山本の妹で新島襄夫人八重の故郷であり、同志社と縁の深い土地であった。一八七五年の同志社英学校創立は、当時京都府顧問であった山本の支援によるところが大きい。キリスト教の浸透も早く、一八八六年一月には、杉田潮（安中教会牧師）と星野光多（高崎教会牧師）によって若松、喜多方において演説会が行われ、同年三月には本六日町に講義所が開かれている。¹⁷一八八九年一〇月には、会津若松に初代牧師山岡邦三郎のもと日本組合若松基督教会が開設された。¹⁸小林たちの中学時代、元自由民権運動の闘士で同志社出身の兼子重光牧師が伝道に当たっており、何人かの会津中学の生徒たちも洗礼を受けていた。兼子は同教会の第三代牧師（一八九五年着任）で、この時期は会津若松地方における「大挙伝道の時期」とされている。¹⁹小林は、中学時代に彼の人生の指針を決めた二つの出来事について、後に次のように記している。

僕が中学に入った動機は軍人になろうというのであった。元来会津は尚武の精神が盛んなところで教会に通う連中の中にも柔剣道の錚々たる人物が多かった。その中で特に光っておったのは柔道の遠藤作衛兄であった。僕が中学に入ったのも海軍兵学校が目的で、理想の人物は東郷大将であった。（中略）何分

武道は飯よりも好きであったので、降っても照っても道場を欠かしたことはなかった。僕と遠藤兄との関係はすでにこの道場から始まるのである。しかし日露戦争後の日本の内情は甚しく変化して行った。そしてそのとき、僕の心に大きな変化を与えた二つの事件が起った。何れも明治四十年の出来事で、一つは幸徳秋水一派の大逆事件、もう一つは北米加州に勃発した排日運動であった。前者は日本の要求するものはや軍人ではないということを悟らしめ、後者は日本人の海外発展について覚醒を与えたのである。²⁰

この文章は、中学卒業後四十五年を経て記された回想であり、大逆事件を明治四十年（一九〇七）とするなど注意を要するが、これによると、中学時代の小林に「大きな変化」が訪れたという。一つは海軍兵学校志望であった彼が軍人への道を放棄したこと。もう一つは、早くも「海外発展」への志向を持ちはじめたことである。カリフォルニア州の排日運動がその契機となり、「海外発展について覚醒を与えた」と説明されている。一九〇六年末には、同州で「日本人学童隔離問題」が起こり、翌年にかけて排日運動が激化、日本の新聞も連日そのことを伝えた。²¹後述するように、小林はブラジル渡航後、米国の排日運動を強く意識しつつ、その日系移民子弟に対する教育理念を形成し展開することになる。この時の「海外発展につ



写真1 会津中学校時代、外国人宣教師たちと（1910年頃、中列右から一人目小林美登利、左から三人目兼子重光牧師、吉田真理氏提供）

いて覚醒」がどういうものであったかは不明であるが、排日に対する疑問や義憤がその契機になったことは想像に難くない。小林の中学時代の写真に、会津若松を訪れた宣教師らしい外国人男女を取り囲んだものがあり、彼が当時から宣教師を通じて「海外」の知識や情報に触れていたことが想像される（写真1）。また、同志社出身の兼子牧師や中学の先輩の遠藤から、米国人教師や留学経験者の多い同志社の雰囲気聞いていたと想像され、米国の排日に関する情報とともに、海外

発展や移民について関心を持つようになったものと考えられる。²²⁾

後年牧師になり、その教育理念の根幹にキリスト教を据えることになる小林も、最初からその教義になじんだわけではなかった。彼はキリスト教に出会った

ばかりの当時のやや屈折した心境を、「ただ教会は精神修養をするところだと聞いて出席してみたが、教会内の空気は我々が道場内で質実剛健な修養鍛錬をするのとは大分勝手が違っていった」と正直に告白している。²³⁾ 彼が教会に通うようになった理由として、先の遠藤の存在が大きな要因とされている。

教会が僕を引き付けたただ一つのものであった。それは遠藤兄のような、僕が平素尊敬して止まない人物が何人かおることであつた。基督教の何たるかを解せぬまでもこんな偉い人々が出席しておるのであるからそこには何か訳あるに相違ない、これは僕も一つ真剣に研究してみようという気になったのである。²⁴⁾

こうして小林は一九〇八年九月一三日、剣道仲間の羽金政吉、田村精元、君島利、曾川順吾とともに兼子牧師によつて受洗する。²⁵⁾ 地縁・学校縁・武道縁が重なって契機となった明治期地方青年のキリスト教入信の一事例として、たいへん興味深いものである。

二 同志社時代

会津中学卒業後の一九一一年四月、小林は同志社神学校に進んだ。当初志望の海軍兵学校や多数の有名校のある東京を飛び越して、学資も不十分なまま会津から遠隔の地である京都の同志社に進

学した動機とはいかなるものであったか。そこには、キリスト教入信同様、先の遠藤の強い推奨が働いていることが知られる。

確か明治四十三年の冬休みの時であったと思う。すでに同志社に入学しておられた遠藤兄が帰郷されて僕を見るや否や「今度帰って来たのは君を同志社神学校に入れるためだ!」とのことであった。(中略) 中学卒業後は大体海外発展ということに決めておったときなので折角の親切な先輩の勸説も直ちに応諾する気にはなれなかった。⁽²⁶⁾

「直ちに応諾する気にはなれなかった」としながらも、小林は、遠藤の誘いに「知己の恩」と「神の導き」を感じ、キリスト教への探究心、まだ見ぬ京都への憧れによって同志社進学を決心したという。また、中学卒業後の進路として「海外発展」、すなわち留学か移民を考えていたことが記されている点は注目される。同志社在学中も「物質的にはいつもピイピイで家郷からの学資など一文も望めぬばかりか、却って反対に京都YMCAからの月給五円の中から、会津中学に通っておった弟の月謝を送った位である」と記されている。このことから、「海外発展」の道を選んだとしても、働きながらの留学を考えていたことが想像され、後年の米国生活では実際にそうしている。当時の決心がこの回想の通りだとしたら、ここに

は、彼の一生を特徴づける未知の土地に対するあくなき好奇心と放浪癖がすでに顔をのぞかせているといえよう。

小林が学んだ時期の同志社は、第七代社長原田助の時代(一九〇七年一月―一九一九年一月)であった。原田とそれを継ぐ海老名弾正総長時代の同志社は、学校としての大発展期であった。⁽²⁸⁾ 原田は後に渋沢栄一と小林を結びつけることになるが、この点については後述する。小林が同志社入学の二年目を迎える一九一二年二月、新島の遭志であった同志社大学が認可され、神学校は神学部へ改組される。注目すべきもう一つの点は、国際主義を掲げた原田によって、内外の著名人による国際色豊かな科外講演がさかに行われるようになったことである。⁽²⁹⁾ また、当時の『同志社時報』には、海外滞在中の卒業生たちからの通信が逐次掲載されていた。⁽³⁰⁾ これらによってもたらされた新知識、海外情報は、小林らの「海外発展」への思いをさらに刺激したことであろう。こうした点から、同志社進学は「海外発展」からの方向転換ではなく、小林にとって、「海外発展」を容易ならしめるもう一つの選択であったことが知られる。小林は、先の遠藤や田崎健作(後の本郷弓町教会牧師)、清水安三(桜美林学園の創始者)らと親交を結んだ。また、学業のかたわら剣道部員として活躍、卒業までに三段を得ている。武道の実践は、趣味やたしなみというだけでなく、小林の活用する〈縁〉の一つとして越境ネットワーク形成にも大きな役割を果たすことになる。



写真2 小林美登利、同志社時代、北海道無銭伝道旅行のいでたち (1914年頃、小林眞登氏提供)

小林の放浪者としての性格は、この同志社時代から顕著になってくる。すなわち、一九一三年の北海道への無銭伝道旅行がその例である。この旅で小林は、天塩の山奥にあるアベシナイ、ポンピラなどのアイヌ人集落を歩いて回った(写真2)。翌年には、九州を旅し、石井十次が宮城県茶臼原に設立した開墾農場を訪ねている。生涯を孤児救済に捧げた石井もキリスト者であり、同志社と関係の深い人物であった。学校縁・信仰縁を求めて、放浪する若い日の小林の姿が想像される。こうして、一九一六年三月一八日、小林は同志社大学神学部を主席で卒業し、同日行われた卒業式には神学部を代表して答辞を述べた。卒業論文の題目は、彼の後の人生を予見するかのような「パウロの異邦伝道」であった⁽³¹⁾。

三 ハワイ・米国時代

同志社大学卒業後、小林は横浜からハワイに渡ることになる。外務省外交史料館所蔵の「外国旅券下付表」によると、小林の旅券は、一九一六年三月二九日、京都府庁から下付されている。旅券番号は、第三一六五六六号、旅行目的は「伝道事業ノタメ」となっている。『同志社時報』の「個人消息」欄にも「小林美登利君、布哇伝道の為め赴任の同氏は六月二日ホノル、に安着、翌日更に布哇島ホノムへ出発の予定なりと来報あり」とある⁽³²⁾。中学時代から「海外発展」の夢を抱き続けてきたという小林は、この時のハワイ到着の感動を一九一六年六月二日の手帳に次のように書き記している。

□□ホノルルが見エタ ホノルル、ホノルル、嗚呼、ゝゝ、余ガ十数年来アコガレシ天地ナリ。船ハ□□□□極メテ容易ニ上陸セル。

直ニ川崎旅館ニ入ル。奥村牧師ノ世話ニナル。諸々案内セラル。⁽³³⁾

ここに記されたように、ホノルル第一日目、奥村多喜衛の出迎えを受けている。この時期の奥村は、マキキ教会の主任牧師として活躍するかたわら、学校兼寄宿舎「奥村ホーム」を経営していた⁽³⁴⁾。翌日、小林は曾我部四郎の待つハワイ島へ向かう船に乗りこんでい

る。奥村も曾我部も同志社神学校で学んだ小林の先輩である。奥村はオアフ島で、曾我部はハワイ島でそれぞれ日系子弟の教育にたずさわっていた。特に、曾我部はハワイ島ヒロ郊外の小さな町ホノムで、伝道とともに、教会・学校・寄宿舎が一体となった「ホノム義塾」を経営していた。以後一九一七年三月末まで約十ヶ月間、小林はこの曾我部のもとで教会役員をつとめ、ホノム義塾の教師を兼ねることになる⁽³⁵⁾。小林のホノム赴任は、同志社という学校縁・信仰縁を通じて国際的なプロテスタント伝道組織ハワイアン・ボード(Board of Hawaiian Evangelical Association)のネットワークに接続した結果、可能になったものであろう。

翌一九一七年四月、小林は米本土に渡る。曾我部牧師とフランク・S・スカッター牧師よりカリフォルニア州バークレーの太平洋神学校のC・S・ナッシュ校長宛の推薦状を手にし、同年五月七日同校に入学することになったという⁽³⁶⁾。こうして小林は約一年間、この太平洋神学校を拠点としたようであるが、ここでも学校縁・信仰縁によるネットワークが活用されている。

このカリフォルニア渡航には、太平洋神学校での勉学とともに、学資を稼ぐための労働と排日問題の調査という目的があったらしい。小林の回顧では、「先進的に排日問題の原因を探らんが為め身を一個の労働者と化してロッキーマン山以西の重なる所を歴訪し」、その足跡はネバダ、ユタ、北アイダホ、オレゴン、ワシントン諸州を

経てアラスカ、メキシコ国境にまでおよんでいる⁽³⁷⁾。小林の海外渡航の動機の一つが米国での排日問題にあったことは先述した通りであるが、すでに一九一三年にはカリフォルニア州で「外国人土地法」が成立し、同州では日本人の土地所有が禁止されていた。小林が米国に滞在していた時期は第一次世界大戦中に当たり、同じ連合軍側に立って戦っていた日米間の関係は相当に好転していたが、一方で米国政府は冷静に排日政策の準備を進めつつあった⁽³⁸⁾。一九一七年、米連邦政府は新しい「移民法」の草案を明らかにしたが、その中には日本人を含む全アジア人(中近東を除く)を「帰化不能外国人」とする項目が含まれていた。こうした排日問題に対処すべく、一九一五―一七にかけて連続して日本から著名なキリスト教指導者を招き、北米太平洋沿岸の日本人移民啓発のための諸運動が行われた。例えば、小林が学資を稼ぐべくカリフォルニア州各地での労働に従事していた一九一七年八月、山室軍平はサンフランシスコを振り出しにロスアンゼルス、バンクーバーなど太平洋沿岸の十七市村をめぐり、計三十八回の集会で一万四三五〇人の会衆に説教を行ったという⁽³⁹⁾。小林はこの山室の説教をどこかで聴いたかもしれない。このような日本人側の努力にもかかわらず、翌一九一八年一月、第一次世界大戦が終わると、カリフォルニア州を中心に排日運動が再燃することになった。一九二〇年には、「インマン法」と呼ばれる日本人の土地所有・借地を禁じたさらに厳しい土地法が成立し、

同様の動きはワシントン、アリゾナ、デラウェア、テキサス、ルイジアナ、ネブラスカ、オレゴン、アイダホ、モンタナの諸州に広がっていった。⁴⁰⁾

この間、小林は、ロッキー山下にモルモン教徒のコミュニティを視察したり、やはり学資を稼ぐ目的でアラスカの銅山で工夫として働いたりしている。同志社の同窓生であった田崎健作は、後に「米国の移民局で十二指腸虫だとのことで三週間ぶちこまれ、金はなくなる、ほとんど絶望のとき、友人小林美登利君がとつじよとして現われ、やがてふたりでアラスカ労働にでかけた」と当時を回想している。⁴¹⁾ 当時アラスカは米国の準州になったばかりでゴールドラッシュ期に当たり、二人が金になる職を求めて転々とし、一攫千金を求めてやってきた荒くれ男たちに混じって立ち働いた姿が想像される。田崎は後に、小林を「一風変わった会津武士の面影を持った人物で、名は体を表すどころか、ミドリ等とはまったく正反對なブルドーザーのような人」と評している。⁴²⁾ このような米国内遍歴の中で、小林は各地で排日の状況を目にし、それを肌でもって感じたことであろう。

こうした移動・遍歴の後、小林は一九一八年九月にニューヨークのオーボルン神学校に入学、勉学の傍ら米東部在住日本人の実情を親しく見聞したという。一九二一年四月に同校を卒業し、南米行きを志す。しかしすぐにブラジル渡航が実現したわけではなかったら

しい。小林の手になる「聖州義塾成立ノ由来」に記された経過を見てみよう。

元ヨリ我が志ス処ハ伝道並ニ教育等ノ精神的事業ニシテ物質的ニハ常ニ甚ダ逆境ニアリ。特ニブラジルノ如キ新開地ニ於ケル我等ノ事業ノ困難ハ云フ迄モナキコトナレバ渡伯ニ際シ先ヅアメリカンミッシヨナリーボードトノ連絡ヲ付テ其後援ノモトニ出發セント試ミタルモ余ノ建言ハ殆ンド同ボードノ顧ミル処トナラズ。カクアルカラハ須ク自ラノ信仰ニ依テ雄々シク立ツニ若カズト覚悟ヲ定メ早速紐育ノ中央ニ於テ一個ノ労働者トナリ鋭意南米行ノ資金調達ニ奮闘シ大正十年ノ五月ヨリ十一月ノ末迄ニ既ニ南米ニ於ケル数カ年間ノ戦闘堪エ得ル費用ヲ貯蓄スルコトヲ得タリ。⁴³⁾

ここには、ブラジルを「我が全生涯ヲ奉ゲテ活動スベキ天地」と早々に永住を決意し、当初はアメリカン・ミッシヨナリー・ボード(American Board of Commissioners for Foreign Missions) という国際的伝道組織の支援をおおぐも果たせず、自力でブラジルでの活動資金を調達すべく、一労働者としてニューヨークで働いたことが回想されている。小林がアメリカン・ミッシヨナリー・ボードに学校縁・信仰縁を感じ支援を求めたのは、母校同志社と同組織の緊密な

関係を考えると当然と思われるが、ここでは同組織のネットワークへの接続が成功しなかったことが知られる。⁽⁴⁴⁾

かくして、一九二一年一月七日、小林は約五年間を過ごした米国を後にしてハドソン河口をエオラス号でブラジルへ向けて船出した。彼は、この出港直前、村井保固という人物に出会った。村井は森村組のニューヨーク総支配人で、小林のブラジル行きの志に感銘を受け、協力を約束したという。出港間際に小林が受け取った村井の手紙には「イエス、キリストを通して熱心に神様に願ひます。何卒此青年の希望を満たし、あなたの御心を此青年を通して行はしめ給え！常に彼と共に居給はん事を願ひあげます アーメン」と記されており、それまで南米行きについて冷淡な反応しか受けなかった小林を感激せしめたという。⁽⁴⁵⁾村井もまた熱心なキリスト者であり、これ以後、小林のよき理解者・支援者となっただけでなく、聖州義塾に一万三千円の寄付や米貨一万ドルの低利融資を行っている。⁽⁴⁶⁾これは信仰縁、エスニック縁による新たな越境ネットワークの成立と理解できる。

四 ブラジル渡航と聖州義塾の設立

小林が米国を後にしてブラジルへ向かった理由について、彼自身が後に次のように記している。

前後六年間布哇及び北米に於ける実地体験の結果略ぼ排日の原因の何れにあるかを確むると共に今後の日本人発展地は北米にあらずして南米にあることを痛感し此新天地に於て我等は再び北米に於ける二の舞を踏まざらんことを希ひ、之が為め大いに精神的啓発事業を起す必要を感じ大正十年单身独力を以て渡伯す。⁽⁴⁷⁾

ここには、彼がブラジルに渡った理由が北米の排日問題に起因し、今後の日本人移民受け入れ先として北米はもはや期待できず、その代替地として南米を期待したことが説明されている。この「新天地」において自分たち日本人が「再び北米に於ける二の舞を踏まざらんことを希ひ」、彼の言う「精神的啓発事業を起す」ことがブラジル渡航の動機であるという。この「精神的啓発事業」が排日予防啓発を含む教育事業であったことは後の小林の活動が証明している。

こうして小林は、一九二一年二月二日にブラジルの首都リオ・デ・ジャネイロに到着、念願のブラジルの土を踏んだ。同月二四日には、サンパウロ市に到着している。当時同市で発行されていた日本語新聞『伯刺西爾時報』（以下、『時報』と略す）には、「小林美登利氏来聖」という記事が記載されている。⁽⁴⁸⁾

このように、ブラジル到着がわざわざ新聞で報じられている点か

ら、小林が単なる一移民として考えられていなかったこと、翌一九二二年から同紙でコラム執筆を担当しはじめている点から、彼は同紙社長の黒石清作とも何らかのネットワークを持っていたと考えられる。『時報』は、米国でも邦字新聞発行にたずさわっていた黒石が経営に当たっていた。黒石自身が米国生活の経験があるだけでなく、妻豊子は米国生まれの二世であった。同紙二二二二号「人事往来」には、「小林美登利氏、西原清東氏を訪問の爲め旧臘西原農園に赴かれたる同氏は三日帰聖再び上地旅館に投宿^⑧」とある。まず、日本人移民の多かったサンパウロ州南部レジストロ方面に赴き、西原清東を訪ねたわけである。^⑨西原は、高知県出身で、元自由民権運動の闘士。キリスト者であり、同志社の第四代社長をつとめた。その後米国に渡り、テキサス州で米作に成功した後、一九一八年、単身ブラジルに渡った。西原はうちづく排日運動にいやがさして米国を去ったとされているが、^⑩小林は、このレジストロ訪問で、同じく北米から新天地ブラジルをめざした先輩である西原に接近し、何らかの助言を得たものと想像される。ただ、この地には長くは滞在せず、サンパウロ市に戻り、『時報』記者として働くようになった。ブラジル到着後まず西原を訪ね、黒石のもとで働き始めた点は、同志社という学校縁・信仰縁と在米経験日本人としてのエスニック縁による越境ネットワークが活用された例と考えられる。

また同年、小林はサンパウロ市にあったプロテスタント長老派教



写真3 小林美登利、雑誌『市民』創刊の頃、マッケンジー大学の印刷所にて（1922年頃、小林眞登氏提供）

会系のマッケンジー大学に入学し、ここを活動拠点に新たなネットワークを築くことになる。^⑪聖州義塾初期の設立者や委員には、同大学の教員やメソジスト教会有力者が名を連ねている。小林は同大学でポルトガル語を専攻するかたわら、謄写版刷り雑誌『市民』（*Cidadão*）を刊行している。『市民』は日本人移民向けのポルトガル語通信教育と啓蒙を目的とした雑誌で、その印刷はマッケンジー大学の謄写版刷り印刷機を借りて行っていたという（写真3）。「市民」というタイトルには、後述するような新しい日系ブラジル市民

の創造という小林の思いがこめられているにちがいない。

小林は、ブラジルでの新たな活動拠点として、一九二二年九月七日に「聖州義塾」の設立を宣言する。すでに同年五月には、大正小学校（一九一五年創立のブラジル最初の日系教育機関とされる）の

一室を使って日曜学校と夜学校を開校していた。また、一九二四年九月七日には十数人の青年同志たちとサンパウロ市郊外サンターナの丘で「サンパウロ教会」というブラジル最初の日系プロテスタント教会の創立宣言を行い、その後伝道・布教につとめた。このサンパウロ教会創立宣言は、十数人の青年同志たちとともにサンターナの丘という丘陵で行われた点において、著名な熊本バンドの「花岡山の誓約」に酷似している。「十数人の青年同志たち」がいかなる人物かを知る資料を持たないが、小林が中心になって開校されていた日曜学校や夜学校に集まる若者たちであつたと想像される。「花岡山の誓約」を知る小林が、それを踏襲してこの創立宣言を行ったことは十分に想像しうることであり、母校同志社や日本の教会との縁を儀礼的行為によって確認・強化しようとする点に日本的プロテスタンティズムの性格を見ることができかもしれない。この時、小林自身は三十四歳の独身青年であり、新天地ブラジルで希望に満ちた生活を送っていたことがうかがわれる。そして、一九二五年九月七日には、サンパウロ市中心部に独立の建物を借り受け（後に購入）、聖州義塾を開塾した。⁽⁵⁵⁾小林はブラジル渡航当初から徹底した日本人移民の永住・同化論者であり、教会と塾の設立記念日をブラジルの独立記念日である九月七日に重ねた点に、彼のブラジルに対する並々ならぬ期待と同塾に対する意気込みが感じ取れる。また、同塾は、サンパウロ市で最初に寄宿舎を備えた日系教育機関であ



写真4 聖州義塾と小林、教師、塾生たち（1931年頃、後列真中、蝶ネクタイの人物が小林、小林真登氏提供）

り、先述のサンパウロ教会を併設し、またブラジル最初の剣道場を備えていた。一九四二年の立ち退きまで、多くの日系移民子弟を受け入れ、日系社会を牽引していくリーダーたちを輩出している⁽⁵⁶⁾（写真4）。

この聖州義塾は、サンパウロ教会と

ともに、運営組織として「ミッソン・ジャポネーザ・ド・ブラジル」(Missão Japonesa do Brasil) という法人組織を構成した。学校・寄宿舎としての同塾はもちろん小林が運営の中心であつたが、ミッソン・ジャポネーザ・ド・ブラジルとしては、当時マッケンジー大学ポルトガル語・文学科長でブラジル長老派教会代表であつたマタテアス・G・ドス・サントスを委員長とし、エラズモ・C・ブラガ（リオ国立大学教授）やジョアキン・コレア（ブラジル連邦貯蓄銀行総支配人）、エリアス・E・エスコバル・ジュニオール（弁護士）らを

委員に迎えるなど、ブラジル法人としての体裁を整えている。また、帝国総領事館館員の齊藤武雄や歯科医院を開業していた村上眞市郎を委員とし、小林自身は主任兼会計をつとめた。⁽⁵⁷⁾同志社で学び米国で磨きをかけた英語を駆使し、マッケンジー大学という学校縁とキリスト教会を介した信仰縁、在米経験・在伯日本人というエスニック縁によるネットワークを活用した、当時の日系社会のどれもがなしえなかった離れ業であった。⁽⁵⁸⁾

聖州義塾の歴史やその事業を展開するに当たった小林の理念については別稿（近刊）で取り上げ、また同塾での二言語・二文化教育の内容と実践については他の別稿において述べたのでここでは詳述を避けるが、彼の越境ネットワークを拡大させることになった排日予防啓発運動との関連において、その歴史的意義や役割についてふれておきたい。小林が米国の排日運動とブラジルでのその予防啓発を意識しつつ自らの教育事業を企図したことは、ブラジル到着数ヶ月後『時報』に発表した「排日解決策」⁽⁶⁰⁾などからも明らかであるが、聖州義塾設立との関連においては、次の「渡伯の使命と其計画 聖州義塾設立趣意書」により明確化される。この「設立趣意書」の冒頭で、小林は「神は我母の胎出でし時より我を選び置き我を異邦人間の伝道者たらしめんとし給ふた」という使徒パウロの言葉を引き、パウロに自らをなぞらえ、「私も亦此使命の覩に生きんとして今此広漠たる南米の一角に立つて我面前に開展して居る精神

的事業に向つて渾身の力を注がんとして居ります」とその抱負を述べている。この「精神的事業」を具体化したのが聖州義塾の事業であるが、「難解な人種の辟見に根ざした排日問題」を解決するため、日本人とブラジル人が共同でその実現に当たるべきことが次のように強調されている。

私は数年間かの排日旋風の渦巻く布哇や北米に生活して、目の当り其苦い経験を嘗めて来た者であります、私は如何にして彼の難問題を未だ排日気分の薄い此南米に於て解決を試みんとして、今既に其実行に取掛かつて居るものであります。私の目下着手して居る仕事は日曜学校と夜学校であります、（中略）殊に面白いのは日曜学校の方で小さい乍も日伯合同の国際的なもので各国人の子供を一緒にして国境を超越した真のコスモポリタンの彼らを訓練して居るのであります。難解な人種の辟見に根ざした排日問題などは此処まで深く踏込んで始めて其根本的解決が見出さるべきであると思ひます（以下略）⁽⁶¹⁾。

この「設立趣意書」発表の後、同年一月～二月に『時報』に連載されるのが「再び聖州義塾設立趣意に就て」であり、この連載中、「真の意味の伯化」という理念が提示される。「伯化」とは「ブラジル化」、すなわちブラジルへの同化を意味する語であるが、こ

これは在米日系人の排日予防啓発運動の一環であった「米化」に対応する造語である。その意味するところを「再び聖州義塾設立趣意に就て」の記述からさぐってみると、「真の意味の伯化」とは、日本民族の「最善最良の美質」を保持しそれを發揮しつつ、建設途上にあるブラジルにおいて日本人移民が「最も優秀なる伯国市民となる事」であり、「忠良無比の伯国市民たる事を事実を以て示す」ことであるとされる。小林独自の永住論・同化論の表明である。さらに彼は、それが「現在の日本人を以て満足し得ないと同時に、現在の伯国並に伯国人を以て満足するものではない」なく、「同時に進化でなければならぬ」と述べている。⁽⁶⁵⁾つまり、「真の意味の伯化」とは、選択的な文化化によって、日本とブラジル両者の美質を身につけたハイブリッドな新しい日系ブラジル市民を創造することであった。この新しい日系ブラジル市民は「優良新進な伯国民と共に理想的新伯国の建設に参与」するはずのもので、同時にブラジルこそがそのような理想郷建設にふさわしい国であると説明されている。⁽⁶⁴⁾小林の文章は、時に飛躍があり、抽象的でわかりにくい点もあるが、以上の記述から、聖州義塾は「真の意味の伯化」を実現するためのエージェントであると理解できる。そして、そこにはキリスト教の世界同胞主義と日本民族の伝統・美質を融合した越境的な教育理念と実践により、排日問題とその予防啓発運動を止揚した理想的国家建設と市民創造への志向性を見ることができると言いかえれば、

「越境移民」としての理想的モデルがここに示されているのである。

このような永住論・同化論にもとづくホスト社会との協調をとえた理念表明の背景として考え合わせねばならないのは、当時のブラジル最初の排日運動の勃興である。ブラジルでは、一九二一年に黒人種の入国を禁止する法案が提出されたのに続き、一九二三年一〇月にはフィデリス・レイス議員によって、黄色人種の新たな入国を制限する「レイス移民法案」が連邦下院に提出された。⁽⁶⁶⁾これに合わせ、ブラジル医学士院長であったミゲル・コウト博士は、日本人移民がブラジル国家の崩壊を狙う膨張主義計画の一員であると批判した。ブラジルでもこうした排日運動が展開されつつあった時代背景を思い合わせると、「真の意味の伯化」という理念表明の歴史的な意義がいつそう明確となる。小林は一九二三年四月から五月にかけて、『時報』に「来るべき問題」を連載し、「遠からず北米に於けると同様な忌はしい問題が我等の身邊に襲ひ来たる様な懸念を起さしめて止まない」という警告を発している。⁽⁶⁶⁾小林は、この論説を発表した理由を「北米にある二十数万の我同胞が嘗めつゝある排日の苦杯を我等に再び此南米に於て繰り返し度くないと云ふ微衷に外ならない」とし、海外の日本人移民が「性急狹隘頑固不自然な島国根性」により拜金主義に陥って短期的な移民に邁進し、ホスト社会で孤立することを戒め、ブラジル人と協調しながら精神面において豊かな理想を求めることを薦めるのである(写真5)。⁽⁶⁷⁾しかしなが



写真5 『伯利西爾時報』に連載された小林美登利の論説「来るべき問題」(1923年5月18日)

ら、一九三四年に排日移民法としての性格が濃厚な「移民二分制限法」が成立することにより、不幸にも小林の懸念は十数年後に的中することになった。

「真の意味の伯化」という表現は、その後小林自身が使用しなくなり、ブラジル日系社会でも普及することはなかった。ただ、聖州義塾がその発展拡張によって一九三六年に先述のミッソン・ジャポネーザ・ド・ブラジルと分離した時も、「然し其の組織の変更ハ何等聖州義塾設立の趣意に変更を与へるものではない」と説明されており、その理念は戦前期を通じて継続したものと考えられる。いずれにしても、小林と聖州義塾の事

業が、その後のブラジルにおける排日予防啓発や伯化運動の先駆をなしたことは否定しがたい。

五 一時帰国と聖州義塾の拡張

一九二八年六月、聖州義塾の基礎が一応できあがると、小林は塾の運営を日本から呼び寄せた弟登次郎に任せ、義塾拡張の資金募集のため一時帰国の途についた。アマゾン河を週行しアンデスを越え、ボリビアを経て、ペルー太平洋側に出、パナマ、サンフランシスコ、ハワイを経由して日本に帰国するという二百二十七日間におよぶ冒険旅行であった。この旅の初期、アマゾン河口の都市ペレンで、その地に住む柔道家前田光世(通称コンデ・コマ)と出会うことになる。武道縁・エスニック縁によるものであるが、小林のネットワーク形成にとって小さくはない出来事であった。前田は、小林らが一九三三年にブラジル最初の日本武道普及組織「伯国柔剣道連盟」を設立する時、これに協力している。また、帰国途中のハワイでは、奥村多喜衛と再会し、当時奥村がホノルルで発行していた『楽園時報』に「南米より帰布して」を寄稿し、「金十弗」を寄附している。この時期、奥村は排日予防啓発を含めた日系人の米化運動の中心を担っており、ブラジルとハワイという新旧二つの日本人移民受け入れ先における日系社会や子弟教育のあり方について積極的

日本に着いたのは、一九二九年二月一日。約十三年ぶりの故国であつた。日本滞在は九ヶ月におよんだが、この訪日の前半の足取りはつかめていない。ただ、この滞在中に日本本土だけでなく、満州、朝鮮に足を伸ばしたことが知られる。この帰国中のできごととして注目されるのは、小林が最晩年の洪沢栄一の知遇を得たことである。

洪沢は日本財界の代表者として、日米関係委員会や太平洋問題調査会を通して米国での排日問題に取り組んだが、その苦い経験がブラジル移民へと関心を向かわせることになったといえよう。一九一三年に開発が開始されたサンパウロ州南部のイグアペ植民地は、ブラジル最初の日系民間資本によって経営された移住地であるが、洪沢が中心になって日本での募金に協力している。ブラジルの日本人移民に、排日運動を惹起した北米の轍を踏ませないための処置である。

洪沢が小林を古河虎之助、原邦造、森村市左衛門、大倉喜七郎、武藤山治ら十一名の日本を代表する財界人に紹介した書簡の控えが残っている。⁽⁷²⁾この書簡の中で、洪沢は、小林をブラジル・サンパウロ市の聖州義塾において日系子弟教育に当たる教育者であると紹介し、彼の事業を支援するよう依頼している。その理由は、「伯国移民之将来に付てハ実ニ憂慮之点多々有之現に米国加州に於ける既往の経験に徴するも、殷鑑遠からざるは御同様熟知の事柄に有之候

間、何卒出来得る丈注意して之を現在に助力致し」と説明されている。米国カリフォルニア州での排日運動のような事態が、将来ブラジルで起こるのを回避する目的が見て取れる。また、洪沢は「老生ハ従来小林氏とは何等之縁故無之候得共」と記しているが、同志社との縁も浅くはない。同志社英学校創立時に多大の募金に応じ、また資金の運用に対して献身的に協力した。⁽⁷³⁾小林の方は洪沢を見たのはじめてでなかったかもしれない。それは、小林が同志社に入學した一九一一年の五月二一日、同志社公会堂において洪沢と森村市左衛門が講演を行つており、⁽⁷⁴⁾彼はこれを聴いたかもしれないからである。ただ、講師であつた洪沢側は、一学生であつた小林を知る機会はなかつたのであろう。

この書簡中には、「右小林氏之事ハ原田氏曾而京都同志社在勤之際より熟知別懇之間柄に有之候由にて、其人格を老生まで証明有之、小林氏希望之事業も都合よく成功候様、充分之助力を勧誘致来候次第に御座候」と記され、この時小林を洪沢に紹介したのは原田助であつたことが知られる。先述したように、原田は小林在學時の同志社社長であり、当時ハワイ大学東洋学部長の職にあつて、洪沢とともに米国での排日問題に取り組んだ同志でもあつた。この小林の日本を代表する財界人たちへの紹介と支援は、洪沢や原田が先の奥村多喜衛らとともに米国で取り組んだ排日予防啓発運動や日米親善活動に連動する試みであり、小林の越境ネットワークが洪沢らの

越境ネットワークに接続することによって、拡張し強化されることを意味した。

このように、小林は洪沢と面談すること五回、一九二九年七月三十一日、海外興業株式会社社長の井上雅二、海外植民学校校長の嶋山比佐衛ら他の海外移民事業関係者とともに東京飛鳥山の洪沢邸での晩餐会に招待され、上記の紹介を取り付けることになる。⁽⁷⁵⁾結果として、洪沢はじめ三井、満鉄、鐘紡、大倉、森村組など日本財界から合わせて約二万五千元という多額の寄付を獲得することになり、これが三〇年代に入ってから義塾拡張（隣家の買収・改装などによる塾生受け入れの増加）の資金となるのである。⁽⁷⁶⁾

この帰国中のもう一つの大きな成果は、柳田富美と結婚したことである。富美は同志社時代の級友柳田秀男の妹で、やはり同志社女学校出身の女性であった。結婚式は一九二九年九月二五日。⁽⁷⁷⁾小林は同年一〇月、サントス丸移民輸送監督に就任。新妻を伴って、十二月一日にブラジルに戻った。富美は小林の生涯の伴侶であり、七人の子どもをもうけ（一四三頁「小林家家系図」参照）、義塾の教師ともなり、ブラジル同志社校友会という学校縁を通じた越境ネットワーク形成にも関わることになる。学校縁・信仰縁が血縁ネットワークに接続したわけである。

以上で取り上げた時期以後、三〇年代にかけて、聖州義塾では塾生も増え、機関誌『聖州義塾々報』や塾生間の回覧誌『Jukusei』

が編集・刊行された。さらに、一九三三年には、小林らによって、ブラジル最初の日本武道普及組織である「伯国柔剣道連盟」が立ち上げられた。このように三〇年代の小林の事業は、初期の労苦が報われるかのごとく順調に発展していったかに見える。また、三〇年代はブラジルにおける日系子弟教育が充実に向かいながら、ブラジル・ナシヨナリズムの台頭によって、その理念・内容が激しく動揺する時代でもある。ブラジル政府のナシヨナリズム政策によって、三〇年代末には日系をはじめ多くの外国系教育機関が閉鎖される。⁽⁷⁸⁾それでも聖州義塾は継続し、やがて一九四一年二月の太平洋戦争勃発を迎えるが、翌一九四二年、当局によってサンパウロ市中心部から立ち退きを命ぜられる。⁽⁷⁹⁾こうして、聖州義塾設立宣言から二十年に渡る小林の事業は、いったん中断のやむなきに至るのである。

おわりに

以上、小林美登利という近代における日本人キリスト者の移動・遍歴の足跡を、会津時代、同志社時代、ハワイ・米国時代、ブラジル渡航後と一時帰国という五つの時期に区分してたどってきた。その中で、一地方青年のキリスト教入信と海外渡航・移民へ至る動機を確認するとともに、その越境過程で出会った人物との関係構築とネットワーク形成を検証した。また、そうした越境ネットワークを基盤として生まれた聖州義塾の歴史的意義や役割について

考察した。小林は、会津において遠藤作衛を通してキリスト教に出会い、兼子重光によって受洗し、原田助ら同志社人脈を通してハワイ・米本土での伝道・留学のきっかけをつかみ、米国ではプロテスタント教会を通して村井保固という支援者を得、また在米体験が一種の資源となってブラジル日系社会での基盤を固めた。さらに、ブラジルにおいては、マッケンジー大学を通してホスト社会での人脈、特に長老派教会を中心とするプロテスタント教会諸派とのネットワークを構築し、ブラジル日本人移民の子弟教育というニーズを背景に聖州義塾を設立し、教育・伝道事業を展開した。

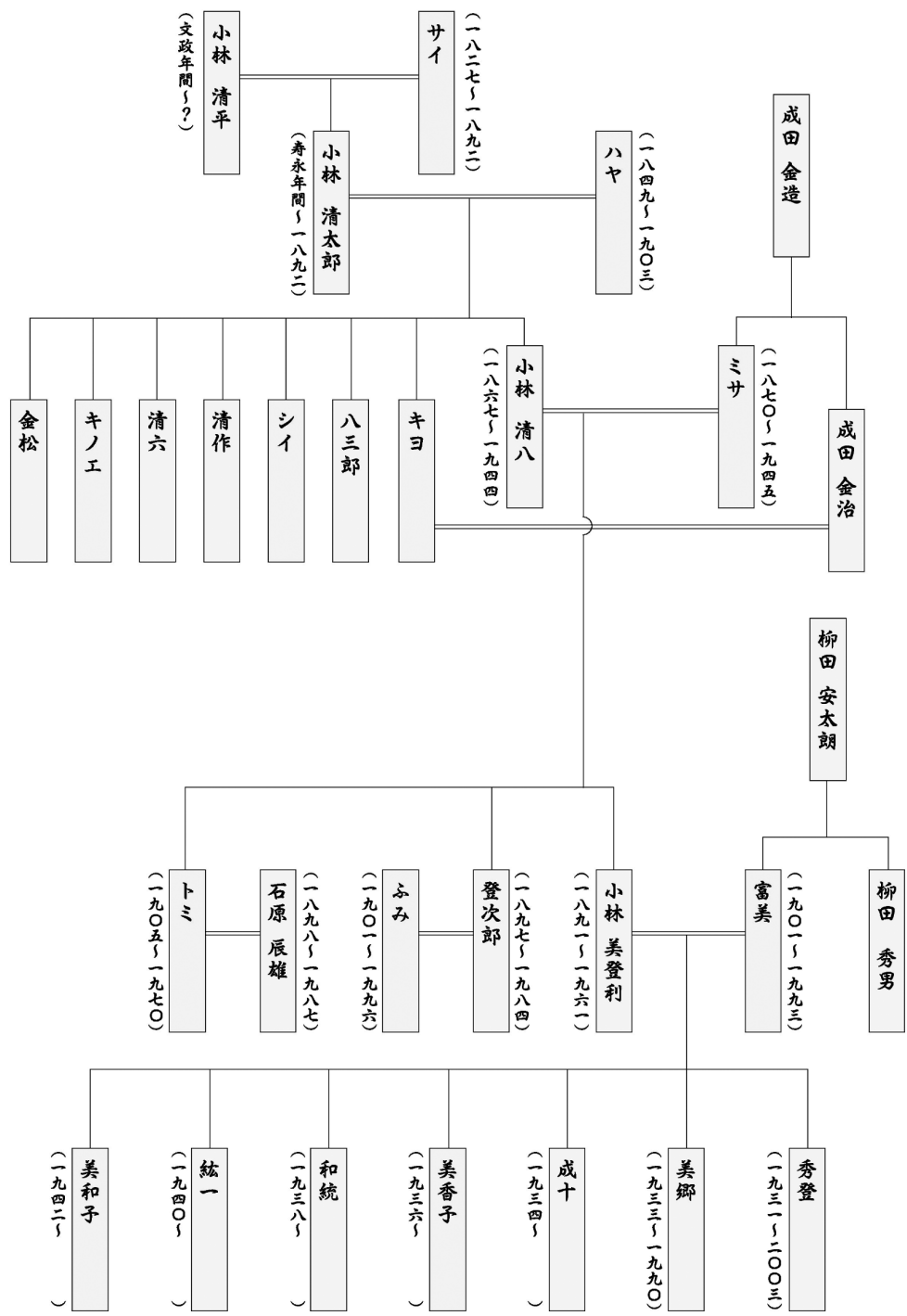
小林は、この過程において、会津という地縁、会津中学や同志社、マッケンジー大学といった学校縁、プロテスタント教会という信仰縁、武道の実践を通じた武道縁、在米・在伯日本人というエスニック縁を活用することによって、日本、ハワイ、米本土、ブラジルを横断する越境ネットワークを形成した。そこには、こうしたさまざまな〈縁〉を活用し、自前のネットワークをより大きく強固なネットワークに接続していくことによって、連鎖的にネットワークを拡大していくというメカニズムが働いていた。

こうして越境化したネットワークは、ブラジルという異国での伝道と教育を中心とする小林の事業を展開するための資源として活用された。聖州義塾は、ポルトガル語とキリスト教精神によって日本人移民をブラジル社会に適応させ、その子弟たちに日本語・日本文

化を継承させる二文化化のエージェントとしての役割を担うとともに、その後も小林の越境ネットワーク形成の要としての役割を果たすことになる。すなわち、日本に一時帰国した小林は、排日予防啓発を含む聖州義塾事業の拡張という名分と原田という学校縁・信仰縁で結ばれた同志社人脈によって渋沢栄一の知遇を得、渋沢の呼びかけによって日本財界から多額の寄付金を獲得し、義塾の事業拡張を達成するのである。当時日米関係委員会の中心人物であった原田と渋沢の支援は、米国内の排日運動への対応と連動していた。小林の越境ネットワークは、在外子弟教育への支援と排日予防、日本人移民の啓発という日本の国益を背景とする彼らのネットワークに接続することによって、拡大し強化されるのである。こうして、小林は米国での排日体験を資源とし、排日運動が予想されつつあったブラジルにおいて、その予防啓発を意識しつつ、「真の意味の伯化」という理念を掲げて自らの教育事業を展開していくのである。

以上のように、小林のような移動性・越境性の高い人物に焦点化し、その越境ネットワークを明らかにすることによって、これまで国や地域別に研究される傾向が強かった日本人移民史を複数の国・地域を横断する視点で捉えなおすことができる。例えば、小稿で取り上げたように、二〇世紀前半に北米と南米に起こった排日運動とそれに対する日本および現地日系社会での反応や対処の運動性をよりグローバルな枠組みにおいて理解する可能性が広がることにな

小林家 家系図



る。

今後の課題としては、小林のハワイ・米国時代の体験の詳細について、ブラジルでのネットワークとの関連性とともにさらなる追究が必要である。特に、排日運動とその予防啓発運動の北南米間における連動性を把握するために、太平洋と両大陸間を越境往還した小林の体験と彼が担った役割について、新たな資料を求めつつ明らかにしていきたい。また、ここで取り上げた時期に続く一九二〇年代末の小林のブラジル帰国から戦前期日系子弟教育最盛期の三〇年代に彼の事業がどのように展開したのか、それが同時期にブラジルで起こった排日運動やナシヨナリズム運動とどのように切り結んでいくのかを、さまざまな〈縁〉を通したネットワーク形成の問題とともに考えてみたい。さらに、一九四二年の聖州義塾閉鎖に至る道筋や戦中の状況、戦後の勝ち負け抗争の混乱を経て、一九六一年のその死に至る小林の活動と新たなネットワーク形成についてもいずれ稿をあらためて述べたい。

注

- (1) 例えば、吉田亮編著『アメリカ日本人移民の越境教育史』（日本図書センター、二〇〇五）や森本豊富、ドン・ナカニシ編著『越境する民と教育——異郷に育ち地球で学ぶ——』（あおでみあ書齋院、二〇〇七）所収

の諸論考、吉田亮「一九一〇年代カリフォルニア日本人移民キリスト教会の越境的リーダーシップ」『移民研究年報』第一七号（日本移民学会、二〇一一、三一—二二頁）などがある。また、「越境史」という言葉は使われていないが、全米日系人博物館企画の「国際日系研究プロジェクト」（INRP）や蘭信三編著『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』（不二出版、二〇〇八）も同様の視点から実施された研究であるといえる。

- (2) 以下の「越境史」の概略は、吉田亮「日本人移民の越境教育史に向けて」吉田編著、前掲注（一）三一—二五頁に拠る。

- (3) Schiller, Nina Glick et al eds, *Towards a Transnational Perspective on Migration: Race, Class, Ethnicity, and Nationalism Reconsidered*. New York: The New York Academy of Sciences, 1992. 同書によれば、「越境移民」は、複数国家や地域間に経済的、政治的、社会的、宗教的、血縁的、文化的ネットワークを構築・維持し、複数国家や地域に対して複合的な忠誠心や帰属意識を提示、複数文化を習得し、複合的アイデンティティを形成、その結果として複数国家や地域形成に対して実質的な影響力を及ぼすという特徴を持つ。

- (4) 吉田、前掲注（二）、一七一—一八頁。なお、ここで使われている「クロスナショナルな研究」とは、一国や一つの地域だけにとらわれず複数国家や地域にまたがる視点から移民を取り扱うだけでなく、移民という現象を惹起する諸地域間の複雑に交錯した要因や関係性を明らかにする研究目的を持つものとして理解している。

- (5) 小稿で取り上げる小林と交流のあった人物として、遠藤作衛（牧師）、兼子重光（自由民権運動家・牧師）、清水安三（牧師・教育者・桜美林学

園創立者)、原田助(牧師・教育者・同志社第七代社長)、奥村多喜衛(牧師・教育者)、曾我部四郎(牧師・教育者)、フランク・S・スカッダー(米国牧師・教育者)、C・S・ナッシュ(米国牧師・教育者・太平洋神学校校長)、村井保固(実業家)、黒石清作(新聞記者・実業家)、西原清東(政治家・実業家・同志社第四代社長)、前田光世(柔道家)、渋沢栄一(実業家)、エラスモ・C・ブラガ(ブラジル牧師・教育者・リオ国立大学教授)、マタテアス・G・ドス・サントス(ブラジル牧師・教育者・マツケンジー大学教授)などを挙げることができる。

(6) 小林と聖州義塾について言及したものに、香山六郎編『移民四十年史』(一九四九)三八四―三八五頁、ブラジル日本移民七〇年史編纂委員会『ブラジル日本移民七〇年史 一九〇八―一九七八』(ブラジル日本文化協会、一九八〇)三二〇頁、日本移民八十年史編纂委員会『ブラジル日本移民八十年史』(移民八〇年祭祭典委員会、一九九一)四二五―四二六頁などがある。

(7) 森脇礼之・古杉征己・森幸一「ブラジルにおける子弟教育(日本語教育)の歴史」ブラジル日本移民百周年記念協会、日本語版ブラジル移民百年史編纂・刊行委員会編『ブラジル日本移民百年史』第三巻生活と文化編(二)(風響社、二〇一〇)二九七頁脚注八一。

(8) 右記の周年史の他に小林と聖州義塾について言及したものに、飯田耕二郎「村井保固と小林美登利」『THE MORIMURA』第五二号(森村商事、一九八六)四―五頁、五十嵐勇作「ブラジルで活躍した小林美登利」『同志社談叢』一一巻(同志社社史資料センター、一九九一)一八一―一八七頁があるが、前者は小林と村井保固との出会いを記した小論であり、

後者は会津という郷土からみた小林のライフヒストリーの概略である。また、拙稿「サンパウロ市リベルダーデ地区における戦前・戦中期の日系教育機関」『龍谷大学経済学論集』四六巻五号(龍谷大学経済学会、二〇〇七)一四七―一六三頁は聖州義塾をサンパウロ市リベルダーデ地区にあって日系教育機関の一つとして概説したにすぎず、拙稿「戦前期ブラジルにおける日系教育機関——聖州義塾と小林美登利」『人文研 JINMONKEN』七(サンパウロ人文科学研究所、二〇〇九)一〇四―一一六頁は同塾の成立過程についてやや詳しく述べているが、国立国会図書館憲政資料室所蔵「小林美登利・聖州義塾関係資料」中の主な資料を紹介することに比重がおかれている。なお、聖州義塾の「聖州」とは在ブラジル日本人の造語で、サンパウロ州の漢語表現である。

(9) 例えば「私」とAさんは面識がないが、同じ出身校であるとする。その事実を知ることによって、「私」がAさんと「縁がある」と感じる場合、Aさんがその関係性についてまったく気づき知らなくても、「私」としてはAさんとすでに特別な関係が想定されているのである。「私」がこの〈縁〉を意識し、Aさんに働きかけ、Aさんがそれに反応し実際の関係が生じることによって、はじめてネットワークが形成され機能することになる。

(10) 「エスニック縁」は、先述の〈縁〉の下位概念で、個人が移住先のホスト国において、同一エスニック集団に属することを契機として発生する人間関係や社会関係、またはそういった関係を成立させる意識であると規定しておきたい。

(11) こうした視点にもとづく日本(史)研究と移民研究の関係および可能

性については、拙稿「日本（史）研究と移民研究——その裾野と可能性を広げるために——」『日文研』四七号（国際日本文化研究センター、二〇

一一）二五—三一頁を参照されたい。

- (12) 小林的生年月日については、一八九二年一月八日説（小林自身の戸籍謄本、小林「履歴書」（一九二九）、五十嵐前掲注（8）、一八一頁）と一八九一年四月二八日説（日本キリスト教歴史大事典編集委員会『日本キリスト教歴史大事典』教文館、一九八八、五三五—五三六頁）があるが、遺族に確認したところ、いずれとも異なり、実際の生誕は一八九一年四月八日が正しく、誕生祝もその日で行っていたという。

(13) 小林的甥、阿部六郎氏からの聞き取りによる。

- (14) 小林美登利「履歴書」（一九二九）の「賞罰」の項には、「義務教育時代学術優等品行方正ノ故ヲ以テ郡長及ビ県知事ヨリ賞表セラル」とある。

(15) 五十嵐、前掲注（8）、一八二頁。

- (16) 福島県立会津高等学校校学而会「剣道部記事」『学而会雑誌』一〇号（一九〇七）一四六頁。

(17) 会津若松教会創立百周年記念事業百年史編集委員会『会津若松教会百年の歩み』（日本基督教団会津若松教会、二〇〇一）三〇七頁。

(18) 同右、七二頁。

(19) 同右、八八—八九頁。

- (20) 小林美登利「遠藤作衛兄と私」遠藤彰編『わが父の働く如く』（私家版、一九五六）六一—八頁（以下原文の引用に際しては、適宜旧字体を新字体に改めた）。

(21) 若槻泰雄『排日の歴史』（中央公論社、一九七二）六八—七六頁。

- (22) 戦前の道府県別出移民数（一八九九—一九三七）でみると、全体で六四万—一六七七人の移民数を記録し、首位広島県の九万六八一人（全体の一五パーセント）を筆頭に、福島県は七位の二万五三六一人（全体の四パーセント）であり、東日本最大の移民県となっている（石川友紀「沖縄県における出移民の歴史及び出移民要因論」安藤由美・鈴木規之・石川友紀・金城宏幸・野入直美『沖縄におけるディアスポラのライフコース——ホスト社会との関係性をめぐって——』平成一三—一五年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書、二〇〇四、琉球大学学術リポジトリ、<http://ir.lib.u-ryukyuu.ac.jp/handle/123456789/13447> 一頁、二〇一二年二月二三日アクセス）。こうした移民の多い県内環境も小林に海外発展や移民についての関心をうながす一因となったであろう。

(23) 小林、前掲注（20）、六一—七頁。

(24) 同右、七頁。

(25) 五十嵐、前掲注（8）、一八二頁。

(26) 小林、前掲注（20）、七頁。

(27) 同右、八頁。

- (28) 同志社社史資料センター『第三十二回 Neesima Room 企画展「大正デモクラシー期の同志社——原田助総長と海老名弾正総長の時代——」資料編』（同志社社史資料センター、二〇〇八）三三三頁。

(29) 小林的入学した一九二二年度の講演をいくつか拾ってみると、石黒猛次郎（同胞教会牧師）「実地神学」、マクドウェル（アメリカ美以教会監督）「修養上の四大要素」、シドニー・ウェップ（ロンドン大学教授）「英國に於ける社会問題」、ハミルトン・ホルト（インディペンデント主筆）

- 「世界の連合」他、セオドル・リチャード（ハワイ伝道会社会計士・雑誌フレンド記者）、フォート（アメリカ共和党ニュージャーゾ州前知事）など、多種多様なテーマと顔ぶれである（上野直蔵編『同志社百年史・通史編一』（同志社、一九七九）七七三頁）。
- (30) 例えば、『同志社時報』第一〇三号（一九一三年一〇月二五日）には、「モスコー観」、「ホノルルより」、「北の旅」などといった通信が掲載されている。
- (31) 『同志社時報』第一三〇号（一九一六年四月一日）。
- (32) 「個人消息」『同志社時報』第一三三号（一九一六年七月一日）。
- (33) 「手帳」（一九一六、国立国会図書館憲政資料室蔵「小林美登利・聖州義塾関係資料」）。
- (34) 中川美佐「土佐からハワイへ——奥村多喜衛の軌跡——」（「奥村多喜衛とハワイ日系移民展」実行委員会、二〇〇〇）八二頁、一〇六—一〇七頁。
- (35) 同志社大学人文科学研究所編「ハワイ諸島キリスト教教勢一覧表」『北米日本人キリスト教運動史』（PMC出版、一九九二）八三一—八五八頁中、一九一七年のホノム教会の「教会役員・書記」の項に「小林M.」としてその名が記載されている。
- (36) 小林成十「小林美登利氏履歴・改訂版」（私家版、二〇〇八）（同書は、小林美登利の三男、小林成十氏によって著述され、筆者に提供された父小林美登利の履歴に関する覚書である）。
- (37) 小林美登利「発展の跡を訪て（承前）」『伯刺西爾時報』二二九号（一九二二年二月二四日）。
- (38) 若槻、前掲注（21）、一五五—一五六頁。
- (39) 坂口満宏「排日問題と太平洋沿岸日本人キリスト教団」同志社大学人文科学研究所編、前掲注（35）、二五六—二六二頁。
- (40) 若槻、前掲注（21）、一六一—一七〇頁。
- (41) 田崎健作「捨身で生きる——ある牧師の生活と意見——」（日本YMCA同盟出版部、一九六四）二〇二—二〇三頁。
- (42) 五十嵐、前掲注（8）、一八四頁。
- (43) 小林美登利「聖州義塾成立ノ由来」『聖州義塾便り』（一九二六、JACAR: Ref4012170800 外務省外交史料館）。
- (44) *The Missionary Review of the World*, vol. XLV (The Missionary Review Publishing Company, 1922, p.412) には「小林のブラジル行き事情が次のように記されている。『It is reported that there are thirty thousand Japanese in Brazil without any religious teachers, not even Buddhist. A young Christian Japanese in New York, Midori Kobayashi, hearing this, determined to go to Brazil to be a missionary to his fellow countrymen, instead of returning to Japan. He is a graduate of the Doshisha in 1916, and of Auburn Seminary in 1921. He applied to the American Board for appointment, but their rules prevent them from commissioning natives as missionaries. So he has decided to take up the work independently, at his own expense.』（『ブラジルには三万人の日本人が、仏教も含めていかなる宗教的指導者もなくに居住しているということが報告されている。ニューヨークの若き日本人キリスト教徒である小林美登利は、このことを耳にし、日本に帰国する代わりに、彼の同胞への宣教

のためブラジルに行くことを決心した。彼は、一九一六年に同志社を、そして、一九二一年にオーボルン神学校を卒業している。彼はアメリカン・ボードにブラジル日本人宣教への指名を申し込んだものの、同ボードの規則は同国人を宣教師に任命するのを阻んでいる。それで、彼は彼自身の出費で、独立して仕事を始めることを決心した」、以上拙訳。

(45) 小林成十、前掲注(36)。

(46) 村井は聖州義塾の事業に対してたびたび寄付を行っているだけでなく、低利で資金を融資するなど、多大な便宜を図っている(『聖州義塾村井固保低利資金返還方二関スル件』一九二八年一月一〇日、JACAR: Ref4012170800、外務省外交史料館)。

(47) 小林美登利「財団法人聖州義塾の概要・一、渡伯の動機」(一九二八、JACAR: Ref4012170800、外務省外交史料館)。

(48) 『時報』二二二号(一九二二年一月一日)に次のように記載されている。「大正五年京都同志社大学神学部を卒りて後北米オーボルン神学校に遊び優等の成績にて同校を出で布哇太平洋沿岸の基督教伝道に従事される小林美登利氏は旧臘二十七日来聖土地旅館に投宿されたるが氏の語る所に依れば先輩西原清東氏を先づ訪問し夫れより邦人集団地を巡回視察する都合なりと」。

(49) 『時報』二二二号(一九二二年一月六日)。

(50) 西原はこの頃レジストロにいたことになるが、問宮國夫「西原清東年譜」『西原清東研究』(高知市民図書館、一九九四)三九〇―四〇七頁には、一九二〇年西原六十歳の時の記事として「この頃、セントラル鉄道沿線のトレメンバーに移り米作経営を行なう。しかし一九二八年頃経営を打

切りアンナディアスに移り野菜栽培を行なう」とあり(問宮國夫、四〇四頁)、レジストロ在住のことには触れられていない。

(51) 若槻、前掲注(21)、一八八頁。

(52) ただ、同大学の入学・卒業者名簿に小林の名を見つけることはできなかった。小林の三男小林成十氏からの聞き取りによると、ポルトガル語を習うかたわら英語を教えていたというから、聴講生兼臨時講師のような人たちだったかもしれない。

(53) 小林成十氏からの聞き取りによる。

(54) 小林美登利「聖州義塾設立趣意書」『時報』二五七号(一九二二年九月七日)。

(55) 小林のブラジル到着から聖州義塾開塾に至る過程については、拙稿「戦前期ブラジルにおける日系教育機関——聖州義塾と小林美登利」、前掲注(8)、一二二頁参照。

(56) 聖州義塾出身のブラジル日系社会リーダーについては、近刊掲載の別稿で紹介している。

(57) 小林、前掲注(47)参照。

(58) ただ、この時点での聖州義塾は、ブラジル当局、ホスト社会、ブラジル日系社会、そして日本の出先官憲としての帝国総領事館の間で微妙な均衡の上に成り立っていた。小林を中心とする「聖州義塾／サンパウロ教会」と「マッケンジー大学／ブラジル・プロテスタント教会諸派」の関係は、越境ネットワーク形成の点から注目に値する。つまり、小林は、キリスト教徒としての立場をつらぬくことで、ブラジル当局やホスト社会の日本人移民反対論者の批判をかわし、排日問題の惹起を危惧する総領事館の

- 支持を受けつつ、移民父兄に対してはキリスト教会を通じたブラジル知識階級（実は反主流派のプロテスタント）とのネットワークが強調された。父兄の立場からすると、ブラジル知識階級とのネットワーク化が、同塾に子どもを託すに頼もしく思えたことであろう。ただ、同じキリスト教徒でも、カトリック教団ブラジルにおけるプロテスタントへの圧迫は相当にきびしいものであった（Matos, Alderi Souza de, *Erazmo Braga, O Protestantismo e A Sociedade Brasileira*. São Paulo, Ed. Cultura Cristã, 2008, pp.120-132）。したがって、小林を中心とする「聖州義塾／サンパウロ教会」と「マッケンジー大学／ブラジル・プロテスタント教会諸派」の指導者たちの接近は、エスニック・マイノリティである日本人移民と宗教的マイノリティであるブラジル・プロテスタントたちの、ブラジル社会におけるマイノリティ同士の協力関係であったことが知られる。こうした小林と聖州義塾、日系社会、ブラジル・プロテスタント教会、ホスト社会間の意識・構図・戦略については、今後考察をさらに深化させる必要がある。
- (59) 根川幸男「戦前期ブラジル日系移民子弟教育の先進的側面と問題点」森本豊富・根川幸男編著『トランスナショナルな「日系人」の教育・言語・文化——過去から未来に向けて——』（明石書店、二〇一二）五四—七五頁。
- (60) 『時報』一三二一（一九三二年三月一〇日）。
- (61) 『時報』二五七号（一九三二年九月七日）。
- (62) ブラジルの漢語表記が「伯刺西爾」であり、「伯」「伯国」はブラジルを意味する。
- (63) 小林美登利「再び聖州義塾設立趣意に就て」四、『時報』二七〇号（一九三二年二月八日）。
- (64) 同右。
- (65) この法案中、日本人移民の入国制限に関わる箇所は次の通りである。『第四条 政府は国民の人種的精神的及び体力的組成に有害と認むるあらゆる分子の入国を遮止するため、其の何れの地より出発し来るを問わず、ブラジルに向かつて渡来する移民に関し、嚴重なる取締りをなすべし』『第五条 黒人種の植民のブラジル入国を禁止す、黄色人種に就いては、該人種の属する国民現住者の3分に相当する数に於いて毎年入国を許可す』（サンパウロ人文科学研究所編『ブラジル日本移民・日系社会史年表——半田知雄編著改訂増補版——』サンパウロ人文科学研究所、一九九六、五〇—五一頁）。この法案は成立することはなかったが、やがて姿を変えて、一九三四年の「移民二分制限法」成立へとつながっていく。
- (66) 小林美登利「来るべき問題」(一)『時報』二八八号（一九三三年四月一三日）。
- (67) 小林美登利「来るべき問題」(六)『時報』二九三号（一九三三年五月一八日）。
- (68) 小林美登利「基督教主義の学校」『聖州義塾々報』第七号（一九三六年九月七日）。
- (69) 小稿では、小林の血縁ネットワークについてはほとんど取り上げないが、彼は後に福島女子師範学校を卒業した妹トミもブラジルに呼び寄せ義塾の教師として採用している。
- (70) 『楽園時報』第二五卷第三号（一九二九年三月五日）。
- (71) 『聖州義塾々報』第二号（一九三一年三月三十一日）の「右寄付金募集

ニ要シタル総費用」中の日本滞在費の報告に「一金四百九十円也 地方出張費（内地、満州、朝鮮）」とある。

- (72) 洪沢青淵記念財団竜門社編纂『洪沢栄一伝記資料』第三八卷（洪沢栄一伝記資料刊行会、一九六二）二六五―二六六頁。

- (73) 沖田行司『日本近代教育の思想史研究——国際化の思想系譜（新訂版）』（日本図書センター、二〇〇七）三六六―三六八頁。

- (74) 同志社社史資料センター、前掲注（28）、四〇頁。右記の洪沢書簡中にも名前が見える森村市左衛門（第六代）は、五十歳を過ぎてからキリスト教に帰依し七十八歳で受洗した人物であり、森村組の設立者として、先に触れた義塾の支援者村井保固を見出し米国進出事業を成功させた実業家であった（ダイヤモンド社編『森村百年史』（森村商事株式会社、一九八六）二二―二五頁。

- (75) 洪沢青淵記念財団竜門社編纂、前掲注（72）書、二六六頁。

- (76) 小林美登利「帰国募金運動ノ結果」『聖州義塾々報』第壹号（一九三〇年九月七日）。

- (77) 小林成十、前掲注（36）。

- (78) 一九三八年中に、サンパウロ州内の日系二九校、ドイツ系七校、イタリア系五校、ポルトガル系四校、計二三五校が経営不能に陥り、州当局から閉鎖命令が発令されている（青柳郁太郎編『ブラジルに於ける日本人発展史・下巻』ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会、一九五三（日系移民資料集南米編第三〇巻『ブラジルに於ける日本人発展史・下巻』として日本図書センター、一九九九年復刻）、二〇一頁）。

- (79) Seção de Ordem Social (サンパウロ政治社会警察) 資料によると、

聖州義塾とサンパウロ教会は一九四二年一〇月をもって立ち退きを強いられたことが確認できる (São Paulo: 28 de outubro de 1942)。

謝辞

ブラジル調査では、人間文化研究機構「在外日本関係資料プロジェクト」および同志社大学人文科学研究所から、日本国内調査では、早稲田大学人間総合研究センターから研究費の補助を受けた。また、小林成十氏、小林真登氏、小林健弥氏、阿部六郎氏はじめ、ブラジルと日本の多くの方々にインタビューや資料収集でご協力をいただいた。ここに記して感謝に代えたい。